



© Martina Pipprich

「テーマ作曲家 イザベル・ムンドナー サントリーホール国際作曲委嘱シリーズNo. 43」は、新型コロナウィルスの世界的感染拡大に伴う各国対応の影響により、海外に在住する作曲家・出演者の渡航・移動に支障がでたため、公演中止となりました。

作曲家のイザベル・ムンドナーとフィリップ・クリストフ・マイヤーより寄せられた、皆様に向けてのメッセージを掲載いたします。

本公司は、2022年以降に改めて開催予定です。今年の公演を心待ちにしてくださっていた皆様に、心よりお詫び申し上げます。

## イザベル・ムンドナーからのメッセージ

ロックダウンのニュースが届いたとき、私はチューリヒの小さなセカンドハウスに滞在していました。この期間をどこで過ごすかなどと考る間もなく、自宅のあるミュンヘンに向かう列車は止まってしまいました。ですが幸いなことに、このセカンドハウスは森の近くにあり、すべてが止まってしまったような数ヶ月をここで過ごす身には大変ありがたいことでした。初めのうちは1日を修行のよう規則正しく過ごすと、朝は作曲のスケッチ、昼は静思黙考し、夕方になれば森の中を散歩するという具合に時を過ごしました。こう言えばいかにも瞑想的な日々に聞こえるでしょう。しかし、最後にはとても疲れてしましました。家族や自分の生徒のこと、友人や近所の人たちがどうしているか、やはり気にかかっていたのです。こうした心配が、やがて日々の生活の中心を占めることになりました。とりわけ生徒たちが気がかりで、連絡を取り合っては相談に乗り、アドバイスをしていました。

さまざまな心配事が心にひっかかり、作曲はなかなか進みませんでした。私はとにかくたくさん思索し、さまざまなスケッチを書き溜め、次の曲に活かすことにしました。しばらく前から私は、日本の伝統音楽やグレゴリオ聖歌といった、耳と記憶をたよりに繰り返すことで音楽を受け継いでいく口頭伝承の様式に関心を持っています。今回サマーフェスティバルのために書いたヴィオラ協奏曲『身ぶり(ジェスチャー)』も、このような私の中のテーマから生まれました。コロナ禍のなか、私はこの形態への傾倒をますます深めました。多くの資料を読み、新しい試みを作曲に取り入れたりもしました。この探究はこれからも続きます。

私たちは皆、今回のコロナ危機は社会にさまざまな痕跡を残すだろうと感じています。私は靈能者ではないので、将来を予測することはしません。ただ、経済不安によって文化芸術になにかしらの悪影響が及んでしまうことは、懸念

しています。この危機が自分自身の作曲にどんな影響を与えるかはまだわかりませんが、その兆しは感じています。これまでの歴史において、いかなる危機も文化を停滞させはしませんでしたが、描いていた未来像が打ち砕かれることはありました。今はまさに、私たちが自らの未来像を再び見つめ直すべきときではないでしょうか。

今年のサマーフェスティバルのお客様に、心からの挨拶を送ります。私自身が皆さんと同じ場所にいられないことは大変残念です。フェスティバルの後には京都に10日間滞在し、美しいお寺や庭園を再訪する計画で、とても楽しみにしていたのです。でも私は、それが今も変わらずに存在していること、そして東京ではこの夏も音楽が鳴り響くということを知っています。この思いは、私の心を大いなる慰めと希望で満たしてくれます。

イザベル・ムンドナー



## フィリップ・クリストフ・マイヤーからのメッセージ

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、残念ながら8月に皆さんにお会いすることが叶わなくなってしまいました。

初めての日本で素晴らしいオーケストラと協働し、たくさんのコンサートを聴き、音楽家の皆さんと交流し、お客様にお会いすることを、僕はワクワクと心待ちしていました。近い将来、このチャンスが再び巡ってくることを願っています。

コロナ騒動の初期のころ、作曲家である僕らの生活にとっては大した違いはないよね、と仲間と冗談を言い合っていたのを覚えています。僕らは日頃から、一人ぼっちで「ステイホーム」で仕事をしていることが多いですから。でも、影響がないと思っていたのは間違いました。この数ヶ月で世の中の多くのことが変わり、自分の毎日にも変化がありました。そして、たとえコロナ前と同じことをしていても、そのことに向き合う自分の意識は明らかに今までとは違っているのです。

この数ヶ月は僕にとって、自らを振り返る時期となりました。本をたくさん読み、映画をたくさん観て、友人たちとビデオチャットで何時間も語り合いました。ピアノの練習を再開し、オーランド・ギボンズ\*の作品を山ほど弾きました。これらはすべて、コロナ前の日常生活のスピードの中では決してできなかつたはずのことです。

コロナが終息したら、絶対に旅をしたいです。近いうちに是非、日本に行きたいと思っています。それまでどうか皆さん、お元気で!

心を込めて

フィリップ・クリストフ・マイヤー

\* Orlando Gibbons (1583-1625):  
英国の作曲家・鍵盤楽器奏者。

## イザベル・ムンドリー

Isabel Mundry (1963- )

シュルヒテルン(ドイツ)に生まれる。1983年から91年まで、ベルリン芸術大学でバイヤーとG.ノイヴィルトに師事。SWR実験スタジオでの研修を経て、86~93年にベルリンのシュパンダウ教会音楽学校で音楽理論と分析を教え、91~93年にはベルリン芸術大学でも作曲と音楽分析を担当。91~94年にはフランクフルト音楽・舞台芸術大学でツェンダーに師事。IRCAMで1年間の研修を受け、94~96年にウィーンで活動したあと、96年にフランクフルト音楽・舞台芸術大学の作曲科教授に就任。2004年にチューリヒ芸術大学作曲科教授に就任し、翌05年には、ベルリン・ドイツオペラで初演されたムジークテアター『ひとつの息——オデュッセイア』がオペルンヴェルト誌で、年間最優秀初演作品に選ばれた。11年からミュンヘン音楽・演劇大学教授を務める。

1997年に秋吉台国際20世紀音楽セミナー&フェスティバルに招かれて以降、ダルムシュタット国際現代音楽夏期講習など世界各国のセミナーで教え、エルンスト・フォン・ジーメンス音楽財団奨励賞(2001)、ハイデルベルク女性芸術家賞(11)など数多の賞を得る。ルツェルン音楽祭(03)、マンハイム国立劇場(04)、シュターツカペレ・ドレスデン(07、同楽団では初)のコンポーラー・イン・レジデンスに選任された。20年5月、SWRシュヴェツィンゲン音楽祭でのムジークテアター『ジャングル』の世界初演が予定されていた(新型コロナウイルスの影響により、音楽祭は中止)。

[平野貴俊]

## フィリップ・クリストフ・マイヤー

Philipp Christoph Mayer (1995- )

ハーナウ(ドイツ)に生まれる。2013年からミュンヘン音楽・演劇大学でイザベル・ムンドリーに師事。15~16年、独仏青少年交流事業の奨学生として渡仏、パリ国立高等音楽院でステファノ・ジェルヴアゾーニに学ぶ。第10回フランシスコ・エスクデロ国際アコディオン作曲コンクール(17)で審査員特別賞を受賞、18年にはドイツ国民学習財団の奨学生としてポンのベートーヴェン・ハウスに滞在。19年以降、マルティン・シュットラーの指導のもと、シュトゥットガルト音楽・演劇大学修士課程に在籍している。 [平野貴俊]